めぐる季節を越えて

山菜歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
めぐる季節を越えて

【Ｎコード】
Ｎ１８７８Ｈ

【作者名】
山菜歩

【あらすじ】
結婚して１０年経った今でも、かみさんに話したことのないエピソード。これだけは墓の下まで持って行くつもりでいる、「あの夏祭りの後の出来事」。私の執筆した短編小説「夏の一頁」のサイドストーリーです。

（前書き）

こちらは私の別作品「夏の一頁」のサイドストーリーとなっております。
まず、「夏の一頁」をお読みになって頂いてから、こちらをお読みいただくことをお薦めします。

結婚して１０年が経った今でも、まだかみさんに話していない事があった。

彼女（かみさん）が夏休み明けに転校してしまい、離れ離れになった後の事だ。

聞かれても絶対に話さない。

かみさんは面白くないみたいだが、こいつだけは墓の下まで持っていくつもりだ・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

かなりの痛手を抱えたまま小学生最後の夏が過ぎた。

「おめー、あいつに告ったの？」

情報提供をしてくれた悪友が、鉄棒に寄りかかりながら、俺に聞いてきた。

奴の手には、約束のラムネの瓶。

”・・・何でそれを聞くかなー・・・”

鉄棒に座っていた俺は、膝を軸にして後ろへ半回転。着地した。

「悪りぃ」

これだけで通じてしまうのもどうかと思うが、悪友は俺に謝ってきた。

「彼女が転校した」と言う事実を先生から聞かされた放課後、俺はすぐに彼女の家に直行した。

（何かの嘘だよな・・・？）
当てのない、わずかな希望を持ちながら俺は走った。
固く閉ざされた門扉。
ボタンを押しても音すら鳴らないチャイム。
俺は呆然と佇んだのだった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

中学に入学しても、高校に入学しても。
俺は新入生名簿を穴が空くのではないかと思われるほど読み漁り、
決まって彼女の名前を探していた。
その度に落胆して・・・。

夢にも彼女が何度も出てきた。

あと少し。
あと数センチで彼女に手が届きそうになるのに。

あと少し。
あと一息で「好きだ」って言えるのに・・・いつもそこで目が覚めてしまう。
目が覚めて、悔しくて何度枕を叩いただろう・・・。
それでも学生生活を送る中で、何度か女子から告白された事があった。
でも俺は、全てやんわりと断っていた。

高校２年生の時だった。

ある日の事。
どうしても苦しさをとどめておくことができなかった俺は、悪友に打ち明けたのだった。

悪友とは結局中学・高校と、同じ学校に通う事になったのだった。
まさに「腐れ縁」ってやつだろう。
（・・・何せ結婚した今も、付き合ってるんだからな）

「未練がましい」と笑われるかと思ったけど・・・。
「別にいいんじゃね？それはそれで。夢にすら出てくるんだろ？お前、そんだけあの子の事が好きだって事なんじゃん？」
火の着いていないタバコをくわえながら、奴は真面目な顔で言ってきた。
”・・・そりゃそうだけどさ・・・つかタバコ出すの、せめて校門出てからにしてくれ”
「へいへい」と言いながら、ヤツはくしゃくしゃのパックにタバコをしまう。
「で、ちゃんとお別れも言ってない訳だ」
”・・・うん。せめて、一言でも言いたかったよ”
俺の返事に、悪友は「ふぅん」と短く言い、真面目な表情になった。

「ちゃんと『さよなら』って言ってない人とは、またいつか、どっかで会えるんだよ。何年、何十年かかるかわかんねぇけどさ」

”・・・え？”
突拍子のない、ヤツの真面目な言葉に、俺は思わず聞き返した。
「これ、婆っちゃんの受け売りだけどな」
”何だよそれ・・・”
「本音を言わせてもらえば、とっとと新しい彼女を作れって感じだけどな。でも、お前らしいよ。一途でさ」

その場は苦笑したが、結果的に悪友の言葉に救われたのだった。
そしてそれが現実の事となるとは、思ってもいなかった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

高校を卒業したあと、俺は四年制の大学へと入学した。
下ろしたての、着なれないリクルートスーツと革靴に違和感を感じながらも、入学式の会場で自分の席を探していた。

どん

誰かとぶつかった。
「きゃ！」
・・・聞き覚えのある、声。

記憶を探る。

心当たりが、あった。
（まさか・・・まさか・・・！）
全身に、鳥肌が立つ。
俺は声の主の方をゆっくりと向いた。

化粧をしているせいか、少し大人びて見えるが、紛れもない「彼女」だった。
ぶつかった拍子に、バッグの中身が散乱したらしい。
はやる気持ちをぐっと抑えて彼女に声をかける。
”すみません、大丈夫ですか？”

「あ、はい・・・」
荷物を集めるのに集中していた彼女は、一言だけ答え・・・目を見開くとバッと顔を上げた。
「・・・って、もしかして、××君・・・？」
俺から話題を振る必要もなかった。

実に7年ぶりの再会だった。

俺達は再会を喜び、お互いに電話番号を交換したのだった。
その日の夜、六時間も電話でしゃべり通していた。
三時間ずつ、お互いに電話代を持って。

彼女は少し性格が明るくなったようだった。
よくしゃべり、よく笑う。
俺は聞き役に徹して、彼女の話しを聞いていた。
別の学校に通っている悪友にも報告した。
悪友は「んあ？そんな事言ったっけ？」ととぼけていたが、電話を切る直前に
「がんばれよ」
と、一言だけ言ったのだった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

同じ学部を専攻していた俺達は、何かと理由を付けて会うようになった。
口実の殆どはレポートだったけど・・・。
「びっくりしちゃったでしょ？」

夏まっ盛りなある日、レポートを終え、俺達は喫茶店で涼んでいた。
”え？”
突然話題を振られて、俺はティー・スカッシュを持つ手を止めた。
「いきなり転校しちゃったでしょ？私」
”ああ・・・その事か。確かにね。うん”

彼女が転校したのは、彼女のご両親の離婚が大きな原因だったらしい。
父親に引き取られたはいいが、転校当事は寂しくて毎晩泣いていたそうだ。
最初は色々と大変だったが、再婚した義母が優しくしてくれた事と、妹ができた事がとても嬉しかったようだ。
笑顔で話す彼女は、とても素敵だった。

喫茶店を出た時、辺りは夕焼けで紅く染まっていた。
遠くからひぐらしの鳴き声が聞こえる。
”少し歩こうか”
俺の提案に、彼女は肯いた。

俺達がいた喫茶店の近くに、森林公園がある。
一歩公園に入ると、新鮮な緑の匂いと蝉時雨に包まれる。
「気持ちいいねぇ」
彼女は背伸びをすると、思いっきり息を吸いこんだ。
不意に昔の事を思い出した。
（神社の境内も、こんな感じだったよなぁ・・・）
懐かしさと共に、「あの時の彼女」への想いと、「今の彼女へ」の想いが一気に込み上げてくる。
ずっと持ち続けてきた、譲れない想い。

（もう迷わない）

”俺、さ”

「なぁに？」

彼女は振り向く。

（もう、後悔を、したくない）

ひと呼吸置いて、彼女の目を見る。

”俺、ずっと、小学生の頃から、君の事が、好き、でした”

俺は、ずっと伝えたかった一言を彼女に言った。

やっと言えた、七年越しの想い・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

俺の言葉に、彼女は涙をこぼした。

一筋だったのが、二筋、三筋と増えていき・・・。

”い・・・いきなりごめん！びっくりしちゃったよね？”

「違うの！」

彼女の大きな声。

そして、俺の目を見て。

「ありがとう・・・。私も、ずっと好きだったよ・・・」

蚊の泣くような、彼女の精一杯の声と気持ちだった。

俺は驚き・・・少し落ち着いたあと、しゃくりあげる彼女の頭を、

俺はそっと撫でた。

「わ・・・私、ひっく、あのお祭りの、ひっく、時の事、ずっと忘

れられなくて・・・」

お祭りのとき、おばあさんに浴衣を縫ってもらったのは、最後におめかしした自分を俺に見て欲しかったから。
俺が、彼女の大好きな花火を用意してくれていた事がとても嬉しかった。
あの頃から、俺の事が好きだったと。

そしてその時の思い出を、ずっと大事にしながら今まで生きてきた事を、泣きながら話してくれた。

（俺も、ずっと、忘れられなかったんだよ・・・）

彼女を、そっと抱きしめる。
そんな彼女が、愛しくてたまらなかった。

何かのいたずらか、今日はあの時の夏祭りと同じ日だった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

付き合ってから、ふたりでいろんな所に足を運んだ。
近所の公園から、何泊かする本格的な旅行まで、本当に色々。

でも、ひとつだけ、足を運んでいない所があった。

それは、「花火大会」

彼女が一番好きなイベントでなのに行かない。
行かない理由も話さない。

この事が原因で、一時期彼女と絶縁状態になった事があった。
（そこは悪友と、ヤツの彼女さんが一緒に説得してくれて、何とか和解したのだが・・・）

”・・・こんな女々しい理由、話せっこないだろ・・・？”
「まあ、気持ちはわかるけどな・・・」
電話先で、悪友は苦笑していた。

この頃から、彼女の「俺いじり」が始まった。
最初は俺から理由を聞きだすのが目的だったようだが・・・年を重ねるにつれ、趣旨が段々ずれてきているようだ。

6年間その事でいじられつつも、大学を卒業し社会人になり、俺は彼女にプロポーズした。
彼女もプロポーズを受け、俺達は永遠に結ばれた。

そして、現在に至る。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

「何が出るかな♪何が出るかな♪」
・・・またかみさんが、妙なモノを仕入れてきた。
某昼のワイドショーで使われているサイコロの、小さいやつだ。

「初恋の隠しエピソード」

・・・また痛い項目を引き当ててきやがった。
「はい、話して」

かみさん、超笑顔。
俺、涙目。

「かみさんが夏休み明けに転校してしまい、離れ離れになった後の事」

聞かれても絶対に話さない。
こいつだけは墓の下まで持っていくつもりだ。
そのつもりだったけど・・・ちょっとは話してみるか。

かみさんの反応を期待しつつ、俺は話し始めた。
もちろん花火の事は隠しつつな・・・。

ｆｉｎ・・・

（後書き）

めぐる季節を越えて。
最後までお読み頂き、ありがとうございます。

こちらの作品は、Ｅｌｗｉｎｇ様のリクエストにお答えして執筆した次第でございます。

＊悪友の一言
「ちゃんと『さよなら』って言ってない人とは～」という台詞は、私が実際に言われた事のある一言です。
私にも会いたい人がいて、その事をある人に打ち明けたら、このような答えが返ってきました。

まだ、実現していませんが・・・（苦笑）

「夏の一頁」で端折っていた部分が、この作品で補完されているでしょうか？

ご意見、ご感想がありましたら、お願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1878h/

めぐる季節を越えて

2011年1月4日15時12分発行